

---

# ごみ箱

うぐいふみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「ごみ箱

### 【著者名】

N4143D

### 【作者名】 うぐいふみ

### 【あらすじ】 ある日の朝、会社の「ごみ箱の中に猫を見た……。

地方都市の郊外で小さな敷地に事務所を構える、とある会社に勤めていたときのこと。

お茶出し当番のその日、朝一番にポットにお茶を溜め、お茶つ葉を捨てようと勝手口のベランダに出た私がごみ箱のフタを開けると、子猫が一匹入っていた。

何の変哲もない水色のポリバケツのなか、猫の体は完全にごみに埋もれていて頭部だけがのぞいている……。

何とも言えない不安な気持ちになる。

まず、生きているのか死んでいるのか判然としない。見えている部分には何の異常もなく眠つているように見えるが、じつと観察していくと固く目を瞑つてぴくりとも動かない。

もしかしたら精巧に作られた置物が捨ててあるのかとも思ったが、入社して5年余り、毎年年末には大掃除をし、決算の時期には棚卸しも手伝っている自分でも社内でこんな置物は一度も見かけたことがなかつた。それに、毛並みなどやけにリアルで、本物にしか見えない。呼吸をしているようでもないし、死んでいるように見えるのだが、だとしたら何でこんな所でこんなふうに死んでいるのか見当もつかない。

事務所の裏手は何年も前からただ整地してあるだけの、普通の民家に囲まれた雑草だらけの空き地になつていて誰でも自由に出入りが出来、そこから平屋建て事務所のベランダに侵入すること自体は特に難しくはない。けれども、猫を捨てるためにわざわざ余所様のベランダに忍び込むなどという行為は、それだけでも常軌を逸している。

同僚に知らせようとも思つたが、もしかしたら事務所の人間が故あって（一体どんな理由なのか。それを聞くことも恐ろしい気がした）捨てたのかもしれないし、何となく話題にしてはいけないよう

な気がして思い止まつた。

生きているのか死んでいるのかもわからない生き物を「み」として出すという後ろめたさを感じながら、結局黙つてフタを閉め、私はいつものように仕事に戻つた。

その日は「みの日」ではなかつたため、「み出しへ翌日以降に持ち越された。翌日は当番は私ではない。

だが、翌日以降も、いつまで経つてもそのことについて口にする者はいなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4143d/>

---

ごみ箱

2010年11月19日07時50分発行